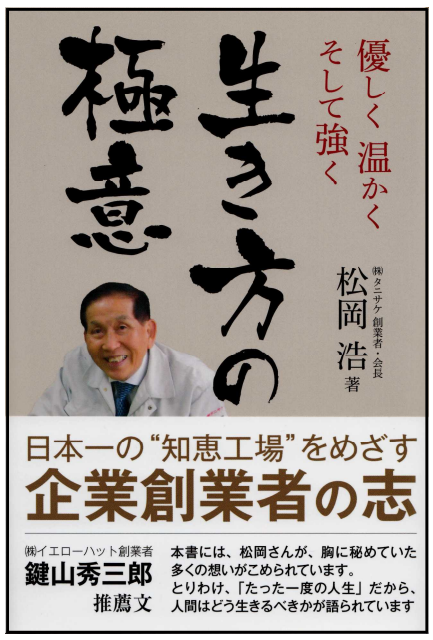
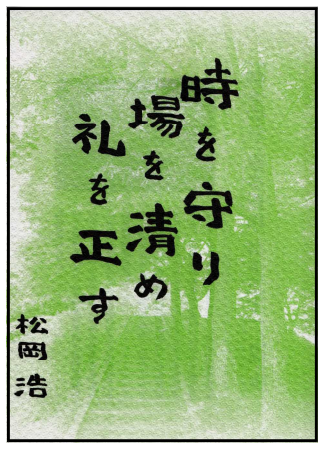
「ひらほく新聞」で検索！
★ホームページ・ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を
閲覧・ダウンロード可能です！

こころにサプリ
THE HIRAHOKU SHIMBUN
# ひらほく新聞
2017年(平成29年)
5月1日 月曜日
第83号

発行所　読売センター平塚北部（ひらほく）山本 直　〒254-0013 神奈川県平塚市田村９-４-32　電話 0463-54-2807



（後半に鍵山秀三郎氏との対談を収録）
ごま書房　1,300円＋税



※紙面でご紹介の書籍、その他はお取り寄せ、お届け可能です。

発刊されている小冊子から、これまで何度も感動悲話をご紹介させていただいてきた㈱タニサケの松岡 浩会長より、この春発刊された新著『生き方の極意』と小冊子、「時を守り、場を清め、礼を正す」（本年2月のある中学校での講演録）が届きました。『贈呈です』とあり、たいへんに恐縮しきり、只々有難く拝読させていただきました。与えられた使命として、小冊子を仕入れ、中学校他へ寄贈、ここに書籍を恩送りさせていただきます。

時を守り、場を清め、礼を正す

私は企業人ですから「時を守り」を「約束を守る」と捉えて、単に時間を守るだけでなく、約束を守ることを意識して生活しています。大切なことは、命の次に信用です。

「場を清め」は、学校や会社の「場」を徹底的に磨き上げることです。トイレ掃除で白い雑巾を使用し、どこを拭いても白い雑巾が白い儘です。これはタニサケの自慢です。

「礼を正す」は、挨拶を行うこと。人と会えば真っ先に挨拶する。特に目上の人から先に「さんづけ」で挨拶します。そして、「はい！」と大きな声で返事をする。

第5章 『先達に学ぶ』より

『人間的魅力いっぱいの「先達」に学ぶ』にて、松岡さんが『間違いなく「日本の宝」、天使のような憬れの女性』と紹介されていた、西端春枝さん（株式会社ニチイ創立に参画）。その感動あふれるお話を一部抜萃、ご紹介します。

◆西端春枝さんプロフィール
大正十一年、大阪生まれ。戦後、夫とともに天神橋筋商店街で雑貨屋「ハトヤ」を開業。後にスーパーのニチイ創立に参画し、数々の役職を経てニチイの名誉社員に。一方、叔母の後を継ぎ、淨信寺（じょうしんじ）副住職を務める傍ら、商業界ゼミナール全国女性同友会の名誉会長として活躍。

尊い存在

春枝ちゃんから聞いたある園児の話です。ある幼稚園に通うユウくんは全盲でした。

周りの子供たちは、そのことを全員が知っています。

子供たちは、ユウくんのことを気遣い、進む先に散らかるおもちゃを皆が必死で片付けます。いつも手探りで遊ぶユウくんを、誰ひとり見捨てていないのです。

何もしないことが悪いと分かっていても行動できない大人とは違い、子供たちは立派に行動を起こします。

何も見えない友のために・・・ユウくんが歩き出すと全員が手を止め、進む道を片付けるのです。

春枝ちゃんは、思わず状況を思い浮かべ、胸いっぱいの想いを募らせたそうです。

大人がよくいう、「かわいそうに」とは、その人を見下げたものなのです。

ユウくんは、優しい友に囲まれた尊い存在だったのです。

母の後ろ姿（春枝ちゃんが語られたこと）

これは、私の生涯忘れることのできない出来事です。それは、一坪半の「ハトヤ」を開店して間もない頃のことでした。実家の父が私たちの店を訪ねてきてから間もない某日、母がやって来たのです。多分、父から私たちの生活の模様を聞いたためだったのでしょう。母が突然に「ハトヤ」の店先に立ったのは、夕方近くでした。

私は母に心配をかけたくなかったので「天神橋」の店を開店したこともいっていなかったのです。突然の母の来訪に正直戸惑いました。今の生活は見られたくもないし、見せたくもありませんでした。「ああ、なんという生活をしているのだろう」可愛い娘の生きるための悪戦苦闘ぶりを目の当たりにして、愕然としたに違いありません。

そんな母の思いなどに心が回る余裕など私にはありません。私の心の中では「早く帰ってくれればいいのに」と思っていた矢先に、「春枝、今夜は泊めてもらうね」といって奥の部屋で孫と遊んでいました。「ところでお便所はどこ？」と尋ねられたのです。さあ困った、と思いましたが、今さらどうなるものでもありません。水道も便所もない生活を送っていたのです。そんな生活を送っていることなど、とても実家には報せられなかったのです。

当時、私たちは国鉄（現JR）天満駅の便所を借りていたのです。もう隠しておくことはできませんでした。それに足の悪い母に、天満駅のお便所に行ってとはいえません。

「お便所ないねん」と答えると、咄嗟のことで「これで、してちょうだい」と、目に入ったバケツを指差したのでした。一瞬、母はたじろいだ表情をしたものの、さすがに、「こりゃ、おもしろいね」といって、音を立てて用を足してくれたのです。

その翌朝のことです。突然、朝ごはんも食べずに「用事があるので帰る」という母を私と主人の行雄とで、天満の駅まで送って行ったのです。現在の天満駅と違って、当時の天満駅のホームは、一直線に長い階段で上って行くようになっていました。「それじゃ、無理せんと、西端さんも気をつけて・・・・」「お母さんもお気をつけて・・・・」。母と私たち夫婦との間の短い別れの挨拶です。朝はまだ早く、靄が立ち込めています。

「それじゃね」といって、母は私たちに後ろ姿を見せて階段に足をのせます。一段、一段、また一段と母は上って行きました。母は振り返らないのです。

その時でした。傍の行雄が、「春枝、よくお母さんの背中を見ておくんだ。瀧のような涙を流しているに違いない」と、呻くような声でいったのでした。

母は泣いていたのです。頬を伝わる涙を流れるままに、二人に見せまいとして、階段を上っていることに私たちは気付いていました。私は黙って頷きました。

その後、この母の後ろ姿を、私は何度思い浮かべたか知れません。無限の慈愛を背中で語りながら上って行った母の天満駅。その時に、行雄は「このままでは・・・・必ず・・・・お母さん」と、誓ったのでした。彼が私に「お母さんの後ろ姿を、しっかり見ておくんだぞ」といった言葉は、とりもなおさず行雄自身に対するものにほかならなかったのです。

私は、この母の後ろ姿をバネにしようと思ったのです。

「西端春枝著 『縁により縁に生きる』ぱるす出版より」

正観さんの教え

これまで2度ほど書籍紹介をさせていただいた小林正観先生。没後6年になりますが、今なお多数の書籍等でその分かりやすい教えを有難く受け取っている方も多いようです。

日々発信を続けている『人の心に灯りをともす』さんの書籍紹介ブログ（斎藤一人さんと小林正観さんを最も多く掲載）は、書籍からの重要部分の抜萃と、関連事項の追記が秀逸です。一編ご紹介します。

そ・わ・か

神が好む人間の行為ベスト・スリーは、「掃除」「笑い」「感謝」であるらしいというのが、「そ・わ・か」の法則です。

神は掃除をする人が好き、笑顔や笑い声が好き、感謝する人が好き、らしいのです。「掃除」と「感謝」は、いわゆる善行として、過去に他の偉い先生方もおっしゃっています。ここに「笑い」がランクインしてくるのは、実は「笑い」は「肯定」を意味しているからです。

自分の子供が、学校の通信簿を持ってきたのを見たら、なんとオール1だった。「きれいだね！」と笑うことができたら、「受け入れた」ということです。

「笑い」とは、肯定であり、受け入れること。実は目の前の現象を起こしてくださっている地球や宇宙や神さまに対して、肯定したということです。つまらないダジャレでも、笑える人は肯定できる人であり、笑えない人は否定した人。

「肯定」とはイコール「喜ばれた」ということ。

神さまは、喜ばれるとうれしくてやる気になって応援・支援をしようと思うみたいなので、肯定的な人にはどんどん味方をしてくれるようになるのです。ですから、いかに自分がついていないか、不運かを言っているとダメ。あまりまわりの人から受け入れられることはない。謙遜のつもりで言っていると、どんどん人間関係がつまらないものになっていきます。

「ついている」「恵まれている」と言っていると、心ある人が寄ってくる。あやかりたい、楽しそうだ、つきあいたい、とまわりの人は思うのではないでしょうか。口から出てくる言葉が肯定的で、感謝に満ちていて、明るいものであると、まわりにも楽しい人たちが集まってくるのです。

「こんなにつらいことがって、とても笑顔になんかなれません」と言ってくる人がいるのですが、宇宙の構造は逆。笑顔にならないから、愚痴、泣き言ばかり言っているから、愚痴や泣き言のタネばかり降ってくる。そういう構造になっています。

なにげなく言っている一言が、かなり重要。

この話を聞いて、「じゃあ、現象は何一つ変わっていないけど、これから愚痴や泣き言を言うのをやめよう」と決意した人が、今までに私のまわりに何百人もいます。その人たちは、愚痴を言わなくなったところから、現象が一変しました。生活が変わりました。だから、これは気持ちの問題ではなくて、宇宙の法則らしいのです。

神さまは、つらいこと、悲しいことに対して「つらい」「悲しい」と言っている人には、まったく応援・支援をしないみたいです。喜んでいる人には、「そんなに喜ぶんだったら、もっと喜ばしちゃおう」と思うらしい。「思うようにならない」と言っている人は、文句や愚痴を言うことによって、神さまから応援されにくいのかもしれません。

『「そ・わ・か」の法則』

サンマーク出版より

（ここまで）

子供が小さいとき、しつけのためと、心を鬼にして真面目な顔をして「怒る（演技をする）」ことがある。しかし、怒っている最中に、なぜか笑いが出てしまうことがある。心の中ではそのことを密かに肯定しているからだ。

批判的で、攻撃的で、愚痴や泣き言ばかり言う否定的な人は、暗い。否定は暗いからだ。

反対に、どんな時も笑っている肯定的な人は、明るい。肯定は明るいからだ。

「喜んでいる人をもっと喜ばせたい」と思うのは神さまだけではない。人間もそれはまったく同じ。『肯定』とはイコール『喜ばれた』ということ」

笑い多き人生をめざしたい。

（ブログ終わり）

～～～～～～～～～～

あの斎藤一人さんも影響を受けたともいわれている教えについて、自分が本格的に知ったのは、正観先生に10代の頃より教えを受けたという天井画絵師・心学研究家『斎灯サトル』さんとの出会いからでした。サトルさんは、江島神社を始め、全国数々の天井画を制作・奉納されている、異彩を放つ著名な絵師で、正観先生のメッセージをサトルさんが書と絵にした素晴らしい「祝彩ひめくりカレンダー」が販売されています。

（B5サイズ・1800円）

また、サトルさんの作品で素敵な絵ハガキなどの他、個人的オススメとして、「元祖トイレの神さま、**烏枢沙摩明王**の色紙」があります。㈱タニサケの松岡会長も自らトイレ掃除、ゴミ拾いを日々凡事徹底、継続されています。

（豆色紙14×12㎝　500円）

さくらの一本桜に

今年の桜の季節、ご当地（神奈川西部）では異常気象に見舞われ、肝心なところで冬の寒さに逆戻り。すっかり開花が遅れて満開は4月上旬に。その分、新年度の入学式以降もしばらく満開状態が続き、長い期間楽しませてくれました。

敬愛する『みやざき中央新聞』、4月17日号の最終面、編集部・野中千尋さんの「取材ノート」『さくら、さくら』が、とても心温まる内容でしたので、一部抜萃、次にご紹介させていただきます。

～～～～～～～～～～

茨城県土浦市にある真鍋小学校には、地域でも有名な桜の木があります。

学校の敷地内に桜の木があるのは珍しくありませんが、この小学校は校庭のど真ん中に桜の巨木が5本、どっしりとそびえているのです。

明治40年に植えられたもので、それぞれ樹齢100年を超える老木でありながら毎年枝いっぱいの花を咲かせているそうです。戦火を乗り越え、たくさんの子どもの成長を見守ってきたその佇まいからは、すべてを包み込んでくれそうな優しさが感じられます。

親しみを込めて「もうひとりの校長先生」とも呼ばれ、卒業後も病気の回復や結婚報告などの「桜へのメッセージ」を寄せる人が多いそうです。

そんな真鍋小学校では、入学式の翌日に「お花見集会」と呼ばれる新入生歓迎イベントが開かれます。1981年から行われている伝統的な行事で、調べてみるととてもほほえましい内容でした。

全校児童で桜を囲み、新6年生が新1年生をおんぶして桜の周囲を回りながら、この木の歴史を話して聞かせるというものです。

おんぶされた1年生はこれから桜と共に過ごす学校生活に、おんぶする6年生はこれまで桜と共に過ごしてきた時間に思いを馳せます。

その1年生も、いずれ最上級生として同じ木の下で新入生をおんぶする日がやってきます。「歴史を受け継ぐ」という言葉がぴったりの催しだと思いました。

～ここまで～

～～～～～～～～～～

この季節、いつも定点観測の如く、海老名の「県立相模三川公園」にて、有難く満開の桜を拝ませていただいています。今年は天候のタイミングが難しいかな？と心配していましたが、4月10日早朝、無事青空の下、元気な桜たちに会うことができました。

天候が崩れた翌日、湧いた思いを筆文字にて一筆。

花たちは自分で咲く場所を選べません。そして、美しく咲くために大切なのは、その樹木であり、見えない地中深くに伸びる根の部分。今春も学びを有難く。